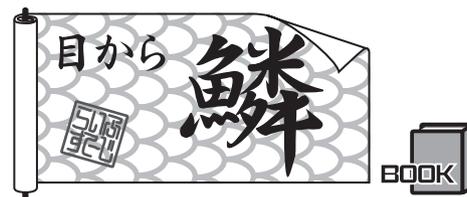


国 家

ΠΛΑΤΩΝΟΣ ΠΟΛΙΤΕΙΑ



今から2000年以上も昔、プラトンの師であったソクラテスが死刑に処された。彼の罪状を簡潔に言うと、「不正を行い、悪事をまげて善事とし、これを他人に教授した」ということである。師の死刑は若かりし日のプラトンに大きな衝撃を与えたに違いない。その理由の一つは、自身の死刑に臨んだソクラテスの態度にある。彼は生きることにこだわらず、堂々として死を受け入れたのだった。そしてもう一つの理由は、正義に生きた人物が国家の名において処刑されるという矛盾であった。

本作品はそうして国家のあり方に疑問を抱いたプラトンが、理想国家とは何かについて書いたものである。ただし、その形式は他の哲学作品の文章と比べて変わった形式をとっている。まず、語るのはプラトン自身ではなく、ソクラテスだということ。そして彼が一方的に語る形式ではなく、他の人物とのやりとりを通して真理を探るという、対話篇の形式をとっていることである。

作品の中のソクラテスの弁証法は産婆術と呼ばれる。これは相手の不確かな知識から演繹して確かな知識の自覚へと至らしめることを、彼の母の仕事

であった産婆に例えて表現したものである。相手の主張が彼自身の知識から演繹された結論と矛盾する理由は、その人の論が初めから持っていた矛盾が知識の〈内容〉ではなく〈形式〉という、いわば思考の側にあったためであると考えられる。ソクラテスの弁証法は、〈考える〉ということそのものを明らかにするものだった。

国家を論じた本作品のテーマを成すのが、「正義とは何か」ということである。彼は考察を進めるため、人間における正義より先に、国家における正義とは何かについて語り出したのだった。より大きなスケールである国家について考察した後に、同じことが人間に言えるかを考えるのが効率的だ、と考えたからだった。こうして本作品でソクラテスによる国家に関する大正論が展開されることとなった。

話が進むにつれて理想国家の姿が明らかになっていく。そこでプラトンは、国家を支配するのは善の実相(イデア)を知る者、哲学者(愛知者)こそが最も適当だとソクラテスに語らせている。一見この論は現実的でないように見える。しかし、現実的とは現実にとって

一番〈善い〉と思われる方法をとることであるから、理想的であることは矛盾しない。この作品にはそういったプラトンの考えが非常によく表れている。

理想に生きたプラトン。彼は真理についてひたむきに考え続け、現実をもっと〈善い〉ものにしようとした。彼がソクラテスに語らせた理想は、今もその力を失うことがない。哲学に興味がある人はもちろん、興味をもったことがない人にもお勧めしたい作品である。
(榴輝)



プラトン著 藤沢令夫訳

岩波文庫

はみだし
すてーじ

ずっとだらだらしていたい……。
⇒仕事をしないと日本という国家からはみだしてしまいますよ。

(工・4 筆名前)
(すではみだしにかけている人；編)